川上 高司 ブログ アーカイヴ

2017年

6月1日

危険すぎるトランプのイラン外交

イランの総選挙が行われ穏健派のロハニ氏が強硬派を押さえて再選された。これは明らかにイランがこれまでの路線を継承するというメッセージである。イランは核合意に沿っていくという意志表示である。

問題はそのイランのメッセージをアメリカがどう受け止めるかである。ロハニ氏が再選後に「アメリカとの数十年間にわたる関係は山あり谷ありだった。アメリカはいつもイランを敵対視してきたのだ」と冷静に語った通り、イランは常にアメリカに秋波を送っていたがアメリカがそれに応じなかった。オバマ前大統領はイランの秋波を正しく受け止めたが、トランプ大統領はイランの秋波を受け付けないつもりのようだ。

その一方でトランプ大統領はサウジアラビアとイスラエルには多大な秋波を送っている。サウジアラビアとは経済的な関係を拡大するつもりだ。だが、サウジアラビアへのあまりにも極端な傾斜は別の危険を生み出しかねない。サウジアラビアへの肩入れは中東地域でのスンニ派への肩入れとなり、スンニ派が勢いを持つことになる。

アルカイダはそもそもサウジアラビアのスンニ派を源とするグローバルなテロ組織である。ISIS もまた周辺のスンニ派国家の支援を受けて拡大したテロ組織である。一方のシーア派過激派はレバノンのヒズボラがあるが、ヒズボラは対イスラエルとの闘争に特化しておりリージョナルな過激派である。イラクのサドル師のグループも活動はイラク国内だけである。スンニ派が世界に及ぼす影響は圧倒的に大きいのである。

アメリカがサウジアラビアに傾斜しイランを孤立化させればスンニ派とシーア派のパワーバランスが崩れていく。それは中東情勢はもちろんシリア内戦にも多大な影響を与えることになる。中東情勢が不安定になりかねないのである。

トランプ大統領の中東政策が歴史的地域的宗教的に繊細な中東の背景を踏まえているのかは図りかねるが、現在の言動を見ていると目前の成果に囚われているようできわめて危うい。テラーソン国務長官が「イランとのチャンネルは開いている」とコメントしているのが一筋の光である。

6月17日

責任放棄の大統領

6 月 15 日、アメリカはアフガニスタンに 4000 人を増派するというニュースが流れた。前政権がアフガニスタンからの撤退を遂行し、現在は米軍 8500 人、NATO から 5000 人がアフガニスタン軍の養成任務に従事しているにすぎない。

そこへ大規模な増派をするということはアメリカが再びアフガニスタンに関与を深

めるということを意味する。このニュースがアメリカだけでなく NATO 諸国をも驚かせたことは明らかである。

発端は 6 月 14 日の上院軍事委員会でのマティス国防長官の発言だった。マティス国防長官は「アフガニスタンで我が国は勝ちを取ることができないでる。増派が必要だがその規模についてはトランプ大統領から一任されており、決定については大統領の承認は不要だと言われた」

この発言を受けてメディアがニュースを流したようだが、16 日マティス国防長官は「増派の規模は決まっていない」と改めてコメントを出した。ダンフォード統合参謀本部議長は「規模は NATO 次第だ。アメリカが増派をすれば NATO も続くだろう。実際イギリスは増派を検討に入った」とコメントし、３０００～５０００人の間になるだろうと発表した。また、アフガニスタンでの任務の変更もありうると含みを持たせた。現在の非戦闘任務だけでなく戦闘任務を再開する可能性が生じた。

そうなれば再びアメリカはアフガニスタンでタリバンとの闘いに挑むことになる。アフガニスタンへの関与はすでに 16 年。さらに泥沼に自ら飛び込むトランプ政権の意図が見えない。

そもそも増派という重要な事項を最高司令官であるトランプ大統領が国防長官に一任してしまったことに問題はないのか。オバマ大統領は 2009 年の着任以来、数ヶ月かけてアフガニスタン戦略を閣僚たちと協議し､増派と撤退のスケジュールを決めた。数千人の兵士の命がかかっているのである。アメリカの命運もかかってた。最高司令官としてその政策決定過程を踏むのは当然だろう。

しかしトランプ大統領は議論を尽くすことなくいち閣僚に丸投げし、増派の規模という重要な事項も勝手に決めていいとしてしまった。アフガニスタン戦略はアメリカだけでなく同盟国である NATO 諸国にも影響を与える重要な政策である。トランプ大統領が最高司令官としての責務を放棄しているとしたら、これからのアメリカ安全保障政策はどこへ向かうのだろうか。